

資料編

札幌市における児童精神医療に関する調査

調 査 結 果

平成 25 年 3 月 31 日

札幌市立大学看護学部

(株) システム環境研究所

1 基礎データ収集

(1) アンケート調査

札幌市からの指示により、以下の病院等を対象にアンケート調査を行った。

アンケートの内容、集計結果等は、資料編参照

種 別	選定方法	送付数	回収数	回収率
全国の児童精神科病院	全国児童青年精神科医療施設協議会の会員施設及びオブザーバー施設	33	16	48%
市内の精神科病院	市内全 38 精神科病院	38	24	63%
市内の精神科診療所	札幌市内の北海道精神神経科診療所協会加盟診療所	45	27	60%
関係団体	札幌市指示による発達障がい等関係団体	15	11	69%

(2) 現地調査

以下の日程により、現地調査を行った。詳細な調査結果等は、資料編参照。

月 日	調 査 先
3月13日(水)	東京都立小児総合医療センター(府中市)
3月14日(木)	国立国際医療研究センター国府台病院(千葉県市川市)
3月15日(金)	三重県立小児心療センターあすなる学園(津市)
3月28日(木)	札幌市児童心療センター

2 基礎データの結果の分析等

(1) 全国の児童精神科病院へのアンケートの分析等

項目	状況分析	検討のポイント、課題等
(1) 運営主体の状況	<p>回答のあった中では、国立、都道府県立で半分以上を占め、残りを市立、民間でシェアしている状況である。</p> <p>我が国では国立、都道府県、市町村が設置する公立病院が運営する責務があることが分かる。</p>	<p>一定程度の広域的な範囲での支援や人材育成を行う、国立、都道府県立がほとんど。児童心療センターは「市立」であり、そういったことが難しい。</p>

<p>② 診療科の状況</p>	<p>児童精神科の単科病院は、視察した三重のあすなろ学園のみ。 単科以外のパターンとしては、以下の4種。 ①大人を含む総合病院内の精神科の一部門（視察先の国府台病院など） ②大人を含む総合病院の小児医療部門の一部門（大阪市立総合医療センターなど） ③大人を含む精神科病院の一部門（島根県立こころの医療センターなど） ④子どもを対象とした総合病院内の一部門（都立小児総合医療センターなど）</p>	<p>児童心療センターもあすなろ学園も、他医療機関との統合計画あり。やはり児童精神科単科での運営は時代の流れを考えると難しい。 左記の4パターンでは、それぞれ一長一短がある。 ①、③では、成人になっても一貫した支援が可能であるが、身体合併への対応等が難しい。 ②、④では、他科診療患者のこころの面でのケア、身体合併の方への対応、敷居の低さ等がメリットであるが、成人後の一貫した支援を行うことが難しい。</p>
<p>③ 病床の状況</p>	<p>病床の規模等は、都立小児総合医療センターを除くと、児童心療センターと全国の他医療機関は大差がない。</p>	<p>児童心療センターと同じ、ある旧第一種自閉症児施設では、児童精神科病床と自閉症児病棟の区分けはなく、患者の経済的な状況等により、どちらの病棟（制度）を使用するか判断しているとのことであった。他の2施設の状況もさらに調査しながら、「のぞみ学園」の今後のあり方を検討する必要がある。 児童心療センターの小児病床部分については、全国的にみても、規模、形状、環境等は適正だと考えられる。</p>
<p>④ 病床利用率</p>	<p>利用率の全国平均は、60%~70%であり、児童心療センターもこの範囲内にある。</p>	<p>児童心療センターと同様に、個室対応が必要な方への対応やスタッフの負担により、満床まで受入できない実態が全国の他病院でもある。</p>
<p>⑤ 従事医師等職員数</p>	<p>児童精神科の従事医師数は、中央値で常勤医4人、非常勤医4、5人であり、常勤医のみに着目すると児童心療センターはほぼ平均値である。児童精神科医療関係の各種認定医の配置状況は、全国レベルで集計しても数人レベルであり、全国的にみても人材育成が課題であると考えられる。</p>	<p>人材育成が課題である。</p>

⑥ 受診対応年齢の状況	<p>外来は、児童心療センターと同様に15歳までとしているのが46%、18歳までが33%、20歳までが7%。</p> <p>入院は、児童心療センターと同様の15歳までが27%、18歳までが20%、20歳までが27%。</p> <p>デイケアは、児童心療センターと同様の15歳までが13%、18歳までが7%、20歳までが7%、21歳以上が13%。</p> <p>初診は15歳、18歳と制限を設けている医療機関が多いが、視察を行った国府台病院、都立小児総合医療センター、あすなる学園を含め、児童心療センターと同様に15歳以上でも再来を受け付けている医療機関も多い。</p>	<p>自由記載欄の記載内容から見ても、成人の精神科を併設している所以外は、受診対象年齢を過ぎた方への対応に苦慮している状況が読み取れる。</p>
⑦ 外来新規患者の受診待機期間	<p>待機期間が無いと回答のあった医療機関はなし。</p> <p>6ヶ月という医療機関もあり。(こどもっくる)</p> <p>全国的には2~4カ月程度が多い。</p>	
⑧ 年間新規外来患者数等	<p>外来新規について、都立小児総合医療センターが1,101人、大阪市立総合医療センターが800人で、児童心療センターの新患数570人を上回っている。</p>	<p>「都立」は別として、「大阪」は常勤医師4名で800人、児童心療センターは5名で570人。こどもっくるは2名で400人。外来総患者数も併せて鑑みると、児童心療センターは、再来患者への対応が割合として多いことが判る。</p>
⑨ 入院期間、平均在院日数等について	<p>児童心療センターを加えた平均値で121.7日で、児童心療センターを除くと107日程度である。児童心療センターは小児病棟においても280日でその他の病院の平均入院期間の2倍以上である。</p>	<p>発達過程を治療上重視する対象者を扱うため、長期間の入院を必要とすることは仕方ない。なぜ、このような状況となっているか検証する必要がある。</p>
⑩ 入院経路について	<p>病院内の外来診療部門以外では、児童相談所・福祉機関が多く、それに次いで、他の診療所等が多い状況。</p>	
⑪ 外来経路について	<p>児童相談所・福祉機関、他の診療所、教育機関が多い状況。</p> <p>中央値では、教育機関が最も多く、教育</p>	

	関係部門との連携が密なことがわかる。	
⑫ 退院経路について	自宅、福祉施設、他病院の順番となっており、自宅が圧倒的に多い。	
⑬ 退院後のフォローについて	ほとんどが病院内の外来診療部門でフォローを行っており、5～6人に1人ぐらいは、他病院の診療科に紹介しフォローしている状況。	
⑭ 相談支援窓口の状況	回答のあった医療機関のうち、約半数程度に設置あり。人数的にはP SW7 名体制のところもあるが、1～3名程度の所が多い。	
⑮ 児童精神科への周辺地域からの期待について	周辺地域の環境や医療機関の状況によってそれぞれではあるが、ほぼ、どの医療機関にも見られるのが、院内学級等と連携した児童精神科病棟としての役割や発達障がいへの対応である。	
⑯ 周辺地域への期待について	一次医療機関としての役割を求める声や教育機関、福祉機関等の機能連携、役割分担を求める声が多い。	
⑰ 児童精神科をめぐる問題点や課題について	医療機関不足、人員不足、成人の発達障がいへの対応等、札幌市が抱える問題とほぼ同様の問題や課題を抱えている。	

(2) 札幌市内の精神科病院へのアンケートの分析等

項目	状況分析	検討のポイント、課題等
① 診療科の状況	回答のあった医療機関のうち、児童精神科を標榜しているのは1施設のみ。精神科と身体的疾患を診る内科等を併せ持つ病院は20病院である。(精神科、神経科、心療内科等のみで構成される病院は4病院)	精神科病院であっても、入院患者等への対応のため、内科等を標榜する医療機関が増えている。

② 従事医師等 職員数	精神科の従事医師数は、中央値で常勤医 6 人、非常勤医 3 人であり、常勤医のみに着目すると児童心療センターは、医師退職前で考えるとほぼ平均値に近い状況である。また、唯一の児童精神科を標榜する施設では、保育士が常勤で 7 名配置されている。	児童精神科医療関係の各種認定医の配置状況は、皆無であり、あらためて人材育成が課題であると考えられる。
③ 精神疾患を 持つ児童の 診療の実施 状況	回答のあった 22 病院のうち、7 病院では実施、15 病院では未実施という結果となった。 入院では、6～11 歳の患者を受け入れているのは 1 病院、12～14 歳では 3 病院、15～17 歳では 5 病院。 外来では、6～11 歳では 1 病院、12～14 歳では 4 病院、15～17 歳では 7 病院、デイケアでは、15～17 歳が 1 病院。 入院期間は、中央値で 26.7 日となっており、1 カ月未満の短期の入院が多い状況である。	少数ではあるが、市内民間医療機関でも受け入れ実績がある。小学生の患者を受け入れているのは、児童精神科を標榜している 1 施設のみである。中学生、高校生まで含めると、市内の数病院で受け入れをしているが、どのような病態の患者を受け入れているかまではわからないので、今後、あらためて、確認する必要があると考えられる。
④ 札幌市の児 童精神科医 療の問題点、 課題等につ いて	児童精神科を担う医療機関数や医師数が絶対的に少ないという全国区での課題のほか、児童心療センターでの児童患者の集中、行政機関との連携不足、15 歳以上は、市内民間医療機関でもっと治療をすべきといった意見等が寄せられている。	児童心療センターへの患者の集中といった意見や連携不足といった意見は、今後のあり方を検討するうえで大きなポイントになると考える。
⑤ 一般の精神 科医、小児科 医等との役 割分担につ いて	さまざまな意見が寄せられたが、児童精神科医や小児科と一般の精神科医の連携が必要といった意見。一般精神科医が児童精神科を担うのは現段階では厳しいといった意見が寄せられている。	児童発症の患者の成人後のフォローは、一般精神科でも行うべきといった意見も寄せられており、逆に大人発症の発達障がいには児童精神科も関わるべきといった意見も良く聞くことから、大人も含めた児童精神科医療の治療が必要な札幌市民全体をどうやってフォローしていくのが大きな課題と考えられる。
⑥ これまでの 児童心療セ ンターにつ いて	札幌市の児童精神科医療の中心的役割を果たしてきたといった前向きな評価が多いが、中には、保健福祉局管理課での病院継続は難しいといった意見や、業務が集中しすぎていたのではないかとといった意見も寄せられている。	児童心療センターが今後安定的な運営が可能かどうかにもよるが、もし病棟を含め、安定的に運営ができるならば、民間医療機関等とのこれまでよりも密接な連携と役割分担

	せられている。	は必須であると考える。
⑦ 児童心療センターから患者の紹介があった場合、対応可能か等	対応困難という病院が多数を占めているが、中には、中学生、高校生で診断がきちんとされていていれば可能といった回答や、受入後、逆にのぞみ学園に戻さなければならぬようなケースで、戻すことが可能であれば、一時的な受け入れは可能といった声も寄せられた。	
⑧ これから、児童心療センターにどのようなことを期待するか等	医師の安定的な確保や児童精神科医療の高度機能病院としての機能を期待する声が多い中で、市立札幌病院への移転、北海道との共同体制の構築、児童精神科医療に関する積極的な情報発信といった意見も寄せられた。	安定的な運営や人材育成のためには、このままの運営形態では厳しいと考えられる。安定的な運営や人材育成を行うためには、どのようにしたら良いのか、意見の中にあつた市立札幌病院への移転や北海道との共同体制。それが現実的でなければ、それに匹敵するような連携策の検討が必須であると考える。


(3) 札幌市内の精神科診療所へのアンケートの分析等

項目	状況分析	検討のポイント、課題等
① 診療科の状況	精神科と心療内科の併設が最も多く、中には皮膚科を併設する診療所もあった。	
② 従事医師等職員数	診療所のため、すべての診療所で常勤医は1名。児童精神科関係学会の認定医のいる診療所も1か所あった。また、保育士を配置している診療所も1か所あった。	
③ 精神疾患を持つ児童の診療の実施状況	回答のあつた22診療所のうち、14診療所では実施、8診療所では未実施という結果となつた。 患者年齢としては、6～11歳では5診療所、12～14歳では11診療所、15～17歳では13診療所、デイケアでは、15～17歳が1診療所。 また、入院が望ましいと判断される患者の有無については、5診療所が稀にあるという結果となつた。	想像以上に多くのクリニックで受け入れている印象であり、児童精神科医療のニーズの高まりを示すものと考えられる。ただし、小学生以下の診療に限ると5診療所であり、中学生、高校生について、どのような病態の患者を受け入れているかまではわからないので、今後、あらためて確認する必要があると考えられる。

④ 札幌市の児童精神科医療の問題点、課題等について	児童精神科を担う医療機関数や医師数が絶対的に少ないという全国区での課題のほか、200万都市としては物足りないといった意見、国・道・市の認識不足、医療機関と行政機関の連携体制の未構築等の意見が寄せられている。	児童心療センターへの患者の集中といった意見や連携不足といった意見は、今後のあり方を検討するうえで大きなポイントになると考える。
⑤ 一般の精神科医、小児科医等との役割分担について	さまざまな意見が寄せられたが、児童精神科医療については、小児科医が中心となるべきといった意見やプライマリー的のどの医師も対応できるようにした方が良いといった意見が寄せられている。	児童発症の患者の成人後のフォローは、一般精神科でも行うべきといった意見も寄せられており、逆に大人発症の発達障がいには児童精神科も関わるべきといった意見も良く聞くことから、大人も含めた児童精神科医療の治療が必要な札幌市民全体をどうやってフォローしていくのが大きな課題と考えられる。
⑥ これまでの児童心療センターについて	札幌市の児童精神科医療の中心的役割を果たしてきたといった前向きな評価も多いが、ほぼ同数の診療所から、敷居が高く改善が必要といった意見、昔は良かったが今は存在感が薄い、孤立していたのではといった批判的な意見も多く寄せられている。	児童心療センターが今後安定的な運営が可能かどうかにもよるが、もし病棟を含め、安定的に運営ができるならば、民間医療機関等とのこれまでよりも密接な連携と役割分担は必須であると考える。
⑦ 児童心療センターから患者の紹介があった場合、対応可能か等	病状によって、あるいは年齢（中学生あるいは高校生以上）であれば可能といった診療所も多い。	
⑧ これから、児童心療センターにどのようなことを期待するか等	現機能の継続を求める声が多い。他には、現場医師と札幌市の事務方との対立はやめてほしいといった意見や利用者や現場スタッフの意見を尊重すべきといった意見、公開、交流を求める声などが寄せられている。	従来どおりの機能を継続してほしいという声も多かったが、全般として、これまでの運営形態等に批判的な意見も多く寄せられている。一つずつ、しっかりその声を受け止め、反省すべきところは反省し、しっかりと改善を図っていくことが必要だと考える。

(4) 関係団体へのアンケートの分析等

関係団体に対し、現在の児童心療センターの業務について、優先順位を付けていただいたところ、以下の結果となった。

結果		
優先順位	業務分類	主な業務内容
	児童精神科外来	15歳以下の子どもの発達障害、強迫性障害、統合失調症、うつ病等の通院患者を診療。不登校児を対象にデイケアも実施。
	児童精神科病棟	発達性障害・不登校・神経症・統合失調症・摂食障害・虐待等の精神医学的治療を必要とする小中学生を対象とした入院治療。
	自閉症児病棟（のぞみ学園）	18歳以下の自閉症・精神遅滞・てんかん等の精神医学的治療を要する患者を対象とした入院治療。
	児童精神科外来（加齢児）	児童精神科外来、児童精神科病棟の患者で、継続して外来治療が必要な16歳以上の方に対する外来診療。
	自閉症病棟（加齢児）	18歳以上となっても、継続的入院が必要な患者への継続入院治療。一時的に状況が悪化した入所施設等利用者への入院治療を行うこともある。
	医師等の民間施設等アウトリーチ業務	民間知的障がい児者施設への訪問による医学的見地からの助言や指導。

※どれも重要度が高く、優先順位をつけることは不可能と回答のあった団体も2団体あった。

その他、これまでの児童心療センターの役割等自由記載欄の分析等

それぞれの団体が、その団体の立場からの多くの意見が寄せられた。要約が困難であったため、キーワードで整理すると以下のとおり。

項目	キーワード整理
① これまでの児童心療センターの運営等について	<ul style="list-style-type: none"> ・札幌市だけでなく北海道全体で大事な役割を担っていた。 ・全国に誇れる施設であった。 （強度の障がい自閉症者や知的障がい者への医療・療育・教育の一元的提供） ・診察待ちが長い ・療育機能が不足

<p>② 今後、札幌市や児童心療センターにいてほしい業務や事業</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・母子入院～幼児期からの家庭支援 ・医療療育 ・保育・相談、在宅生活アドバイス ・総合医療の提供（内科・外科疾患、循環器など） ・人材育成 ・理解普及啓発活動 ・市の障害児の専門病院としての機能の継続（入院機能、成人期の対応など） ・自閉症者対策 ・成人へのスムーズな移行、生涯にわたっての対応
<p>③ 現在の札幌市全体の児童精神科の医療体制について</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・量的な不足状態の解消（診療待機の解消） ・人材育成 ・札幌市児童心療センターを中心とした精神医療連携、ネットワーク構築 ・情報発信、理解普及啓発
<p>④ 民間医療資源も含めた札幌市の児童精神医療のあり方について</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・早期の段階からの児童精神医療への対応 ・早期発見・早期療育 ・保護者支援 ・急性憎悪時の対応 ・児童期から成人・高齢障がい者まで一貫した複合的支援システムの構築 ・量的不足の解消 ・連携・ネットワークの構築 ・小児科医師も診療できるような体制整備
<p>⑤ あり方等を実現するために、札幌市や児童心療センターはどのようなことを行うべきか</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・児童期に特化する場合は、医療（治療）と福祉（支援）の両方を兼ねる必要がある ・児童精神医療の中核としての役割（初期対応、緊急対応、入院、福祉機関との連携） ・先進医療の情報発信、相談対応、研修会の開催 ・人材育成 ・困難ケース（自閉症など）に対する児童期～成人期以降にわたる医療対応 ・療育対応 ・相談窓口（コーディネーター機能）
<p>⑥ その他</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・医師が常駐する診療センターや発達センターの整備（発達障害児、重心児、知的障がい、自閉症） ・医師の確保・充実、人材育成 ・成人期の対応 ・困難事例の研究と治療

3 札幌市の児童精神科医療のあり方、方向性の検討

札幌市立大学看護学部・大学院 看護学研究科

このたび、札幌市からの「札幌市の児童精神科医療に関する調査」研究受託を得て、基礎データ収集のためのアンケート調査への助言、全国の主だった児童精神科医療施設への視察、および、札幌市児童心療センターの現状把握のための関係スタッフへのインタビューを実施した。これらのプロセスを通して、札幌市の児童精神科医療のあり方をどうするかという問いに対する回答は「継続」以外には考えられない。問題はどのように継続する事が可能であろうかという方向性であろう。

ここで以下の2つの方向性を提言してみたい。なお、これはあくまで受託研究を受けた立場としての個人的な意見であり、今後、札幌市精神保健福祉審議会児童精神科医療検討部会でのたまたま的なものになることを期待している。

札幌市という地域に根ざした札幌市児童心療センターであるということ

これまでの札幌市児童心療センターは、札幌市民はもちろんのこと、北海道民にとっても大きな役割を担ってきた。特に昨今、子どものこころの病理を扱う児童精神科医療のニーズが高まるに従って、その役割に期待される点は大きくなるばかりである。現在、札幌市の計画により、障がい児・者に対する福祉・保健・医療の面で効率的および効果的なサービス提供を全般的に所管できるように再構築が行われている。今回視察した三重県立小児心療センターあすなる学園も、札幌市と同様な計画に基づき、肢体不自由児施設と統合し、国立病院隣接地への移転への準備を頻頻と進めていた。札幌市児童心療センターを札幌市という地域で存続していくためには避けられないことである。

そのためには、札幌市児童心療センターを中心とした関係機関・団体との精神科医療連携やネットワークをこれまで以上に構築していかなければならない。今回、アンケートを対象とした札幌市内の精神科病院、精神科診療所、発達障がい等関係団体はもちろんのこと、小児科医療、福祉および教育関係団体や全国の児童精神科病院等とも必要に応じて連携していかなければならない。視察した東京都立小児総合医療センターでは福祉および教育との関わりとして関係者向けのセミナーを実施しており、小児科医や医療福祉関係者が参加している。前身の東京都立梅ヶ丘病院の時から続いており、年々参加者は増えているという。このように児童精神科医療に関する研修会や普及啓発活動等を札幌市児童心療センターから発信することも札幌市という地域を基盤とする以上必要な役割だと思われる。そのような1つ1つの活動の積み重ねが連携構築として揺るぎのないものに変えていくと思われる。

オール・スタッフによる札幌市児童心療センターであるということ

医療・保健・福祉の領域では、チームにおける連携および協同を欠かすことはできない。特に児童精神科医療領域においては、医療・保健・福祉・教育が一体となって、子どものこころの健康増進を図ることが必須となる。このたび、医師の退職に関する点に問題がクローズアップされたが、今回の事態を機に医師職以外のスタッフでも札幌市児童心療センターのあり方を再確認する動きがあったことを、スタッフへのインタビューを通して知ることになった。チーム内全体に動揺が走るなか、スタッフ同士で自主的には話し合う機会を得ようとする活動がある反面、モチベーションを喪失したスタッフもいたことは見逃せない。特にのぞみ分校のスタッフに至っては、教育委員会所轄であるために

説明会にすら参加できないなどの処遇下に半年以上置かれ、新年度を迎えるにあたり児童数に見合う定数として教員数が約 1/3 に縮小された。このように医師の退職に伴い、他のスタッフへも様々な影響を及ぼす結果となった。

再掲となるが児童精神科医療領域において、札幌市児童心療センターは医療・保健・福祉・教育が一体となって成立した初めての施設と言っても過言ではない。今一度、自分の職種および専門職としての役割、そして多職種との連携および協同について考える機会ではないかと思われる。その過程を経てオール・スタッフによる札幌市児童心療センターが進むべき姿が明らかになるとと思われる。

資料編

1 アンケート集計結果等

- (1) 全国の児童精神科病院
- (2) 市内の精神科病院
- (3) 市内の精神科診療所
- (4) 関係団体

2 現地調査結果

- (1) 東京都立小児総合医療センター（府中市）
- (2) 国立国際医療研究センター国府台病院（千葉県市川市）
- (3) 三重県立小児心療センターあすなろ学園（津市）
- (4) 札幌市児童心療センター

1 アンケート集計結果等

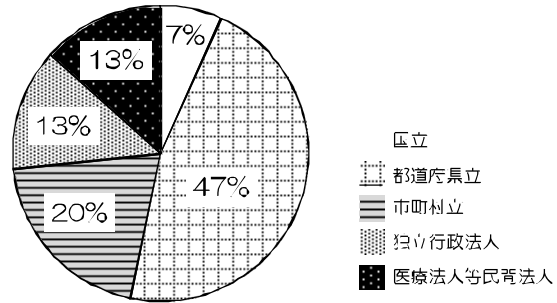
(1) 全国の児童精神科病院

1) 病院基本情報

① 運営主体の状況

[設置者]

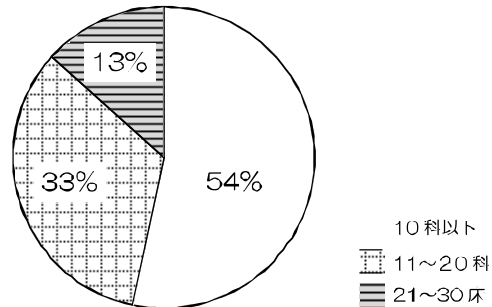
設置者	病院数
国立	1病院
都道府県立	7病院
市町村立	3病院
独立行政法人	2病院
医療法人等民間法人	2病院



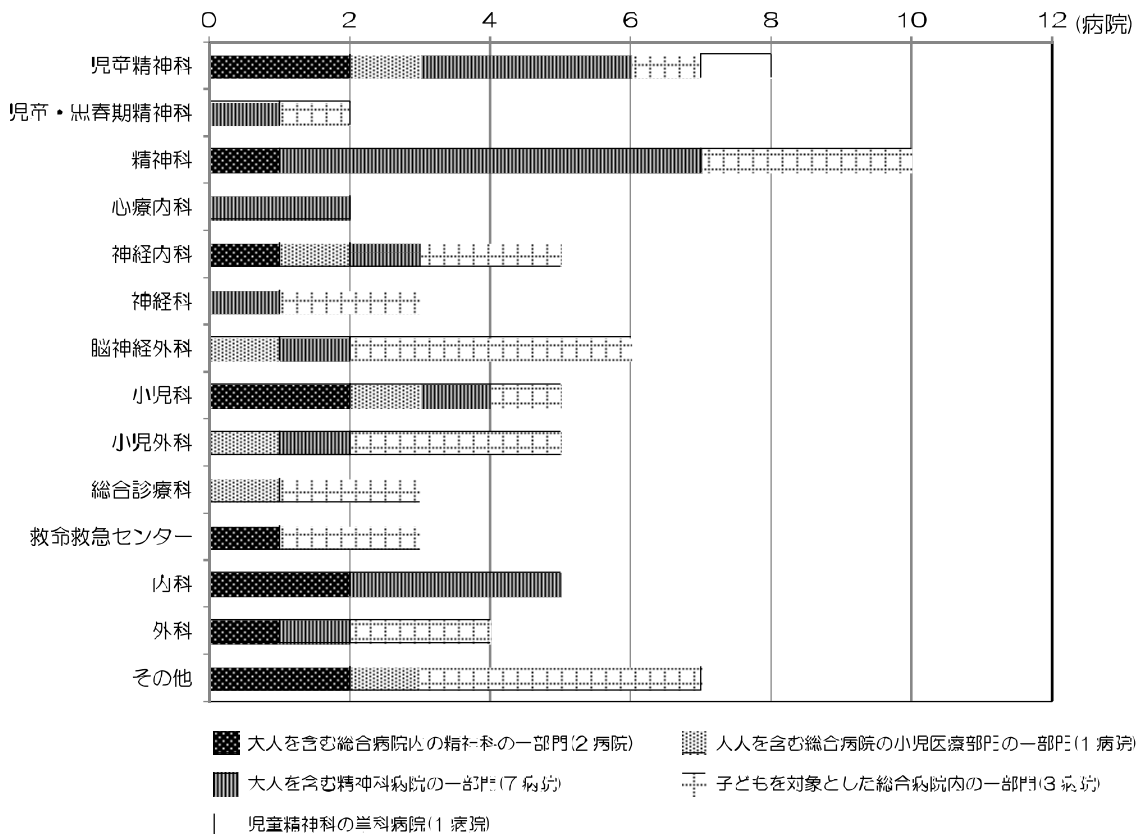
② 診療科の状況

[診療科数]

診療科数	病院数
10科以下	8病院
11~20科	5病院
21~30科	2病院
31科以上	0病院



[主要診療科]



③ 病床の状況

[開放病棟病床数]

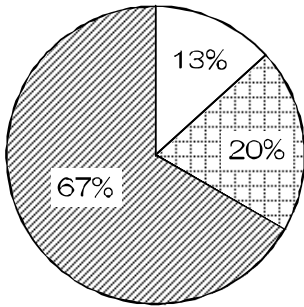
病床数	病院数
1~20床	2病院
21~40床	3病院
41床以上	0病院
なし	10病院
無回答	0病院
平均値	21床

[閉鎖病棟病床数]

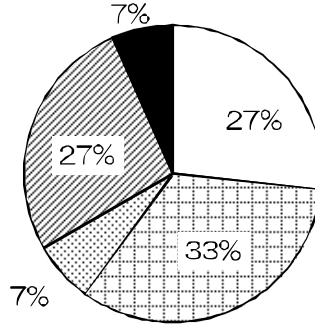
病床数	病院数
1~20床	4病院
21~40床	5病院
41~60床	0病院
61床以上	1病院
なし	4病院
無回答	1病院
平均値	38.8床

[隔離病床数]

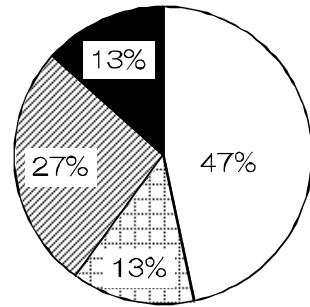
病床数	病院数
1~5床	7病院
6~10床	2病院
11床以上	0病院
なし	4病院
無回答	2病院
平均値	3.4床



□ 1~20床 ▨ 21~40床
 ▩ なし



□ 1~20床 ▨ 21~40床
 ▩ 41~60床 ▧ 61床以上
 ▦ なし



□ 1~5床 ▨ 6~10床
 ▩ なし ■ 無回答

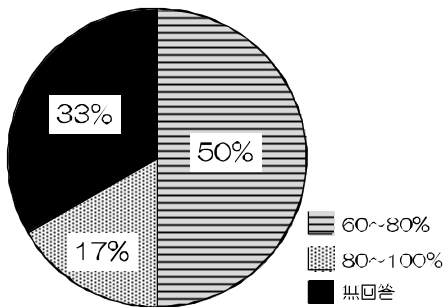
④ 病床利用率

[開放病棟年間病床利用率]

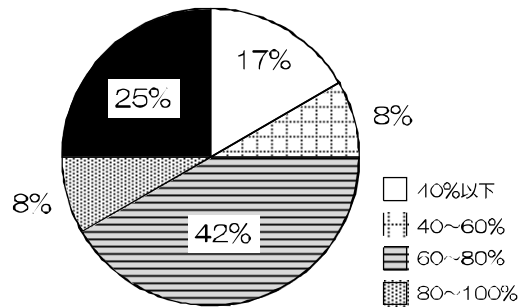
病床利用率	病院数
40%以下	0病院
40~60%	0病院
60~80%	3病院
80~100%	1病院
無回答	2病院
平均値	69.0%

[閉鎖病棟年間病床利用率]

病床利用率	病院数
40%以下	2病院
40~60%	1病院
60~80%	5病院
80~100%	1病院
無回答	3病院
平均値	60.6%



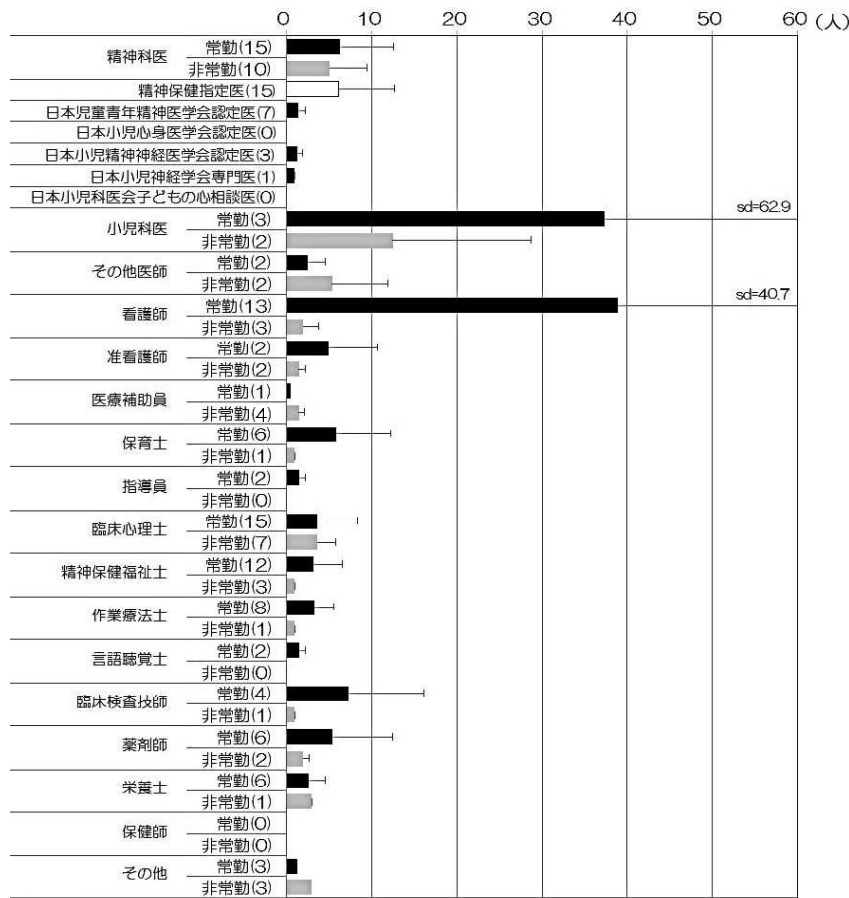
▨ 60~80%
 ▧ 80~100%
 ■ 無回答



□ 40%以下
 ▨ 40~60%
 ▩ 60~80%
 ▧ 80~100%
 ■ 無回答

⑤ 従事医師等職員数

[児童精神科の平均職員数]



※ () 内は各種職員を有する病院数。誤差範囲は標準偏差。

⑥ 受診対応年齢の状況

[外来患者受診対応年齢]

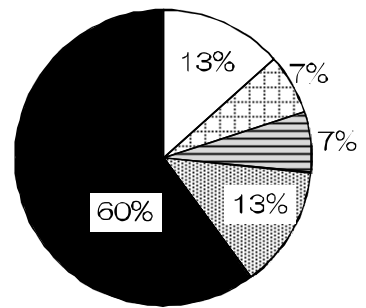
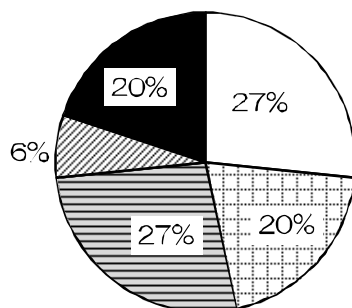
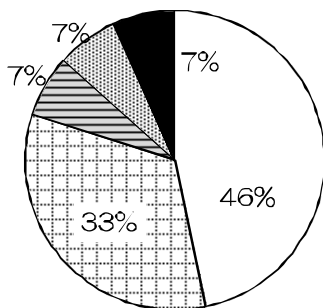
受診対象年齢	病院数
15歳まで	7病院
18歳まで	5病院
20歳まで	1病院
21歳以上	1病院
特になし	0病院
無回答	1病院

[入院患者受診対応年齢]

受診対象年齢	病院数
15歳まで	4病院
18歳まで	3病院
20歳まで	4病院
21歳以上	0病院
特になし	1病院
無回答	3病院

[デイケア受診対応年齢]

受診対象年齢	病院数
15歳まで	2病院
18歳まで	1病院
20歳まで	1病院
21歳以上	2病院
特になし	0病院
無回答	9病院

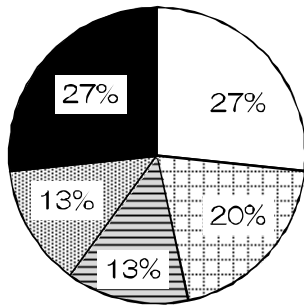


□ 15歳まで ▨ 18歳まで ▩ 20歳まで ▪ 21歳以上 ▧ 特になし ■ 無回答

⑦ 年間延外来患者数等

[外来患者年間延患者数]

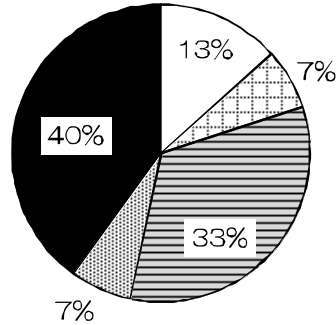
患者数	病院数
5,000人以下	4病院
5,001~10,000人	3病院
10,001~15,000人	2病院
15,001人以上	2病院
無回答	4病院
平均値	10,622.3人



| 5,000人以下
 || 5,001~10,000人
 ||| 10,001~15,000人
 |||| 15,001人以上
 ■ 無回答

[入院患者年間延患者数]

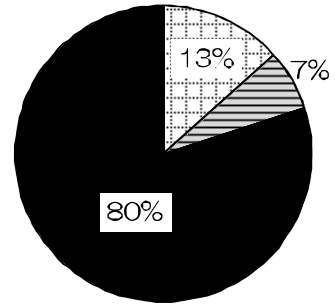
患者数	病院数
100人以下	2病院
101~5,000人	1病院
5,001~10,000人	5病院
10,001人以上	1病院
無回答	6病院
平均値	16,269.0人



| 100人以下
 || 101~5,000人
 ||| 5,001~10,000人
 |||| 10,001人以上
 ■ 無回答

[デイケア年間延患者数]

患者数	病院数
100人以下	0病院
101~5,000人	2病院
5,001~10,000人	1病院
10,001人以上	0病院
無回答	12病院
平均値	4,957.2人

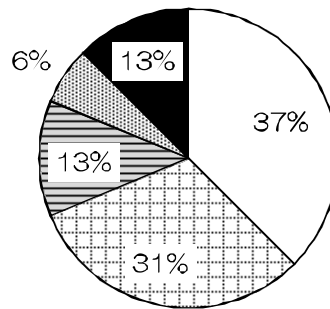


||| 101~5,000人
 || 5,001~10,000人
 ■ 無回答

⑧ 外来新規患者の受診待機期間

[受診待機期間]

受診待機期間	病院数
1ヶ月以下	6病院
2~3ヶ月	5病院
4~6ヶ月	2病院
7ヶ月以上	1病院
無回答	2病院



| 1ヶ月以下
 || 2~3ヶ月
 ||| 4~6ヶ月
 |||| 7ヶ月以上
 ■ 無回答

⑨ 年間新規外来患者数

[外来患者年間新規患者数]

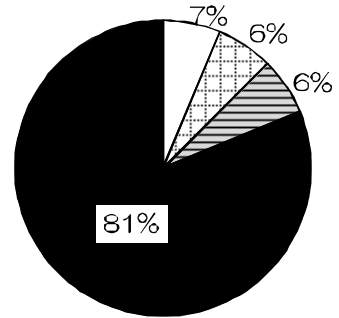
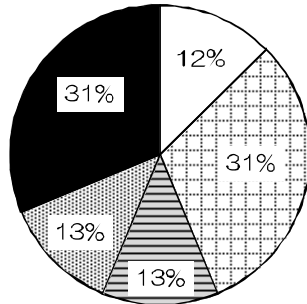
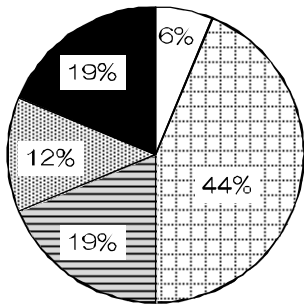
患者数	病院数
200人以下	1病院
201~400人	7病院
401~600人	3病院
601人以上	2病院
無回答	3病院
平均値	438.0人

[入院患者年間新規患者数]

患者数	病院数
20人以下	2病院
21~40人	5病院
41~60人	2病院
61人以上	2病院
無回答	5病院
平均値	88.0人

[デイケア年間新規患者数]

患者数	病院数
10人以下	1病院
11~20人	1病院
21人以上	1病院
無回答	13病院
平均値	13.7人



200人以下 201~400人
 401~600人 601人以上
 無回答

20人以下 21~40人
 41~60人 61人以上
 無回答

10人以下 11~20人
 21人以上 無回答

⑩ 入院期間、平均在院日数について

[入院期間 3ヶ月未満の患者数]

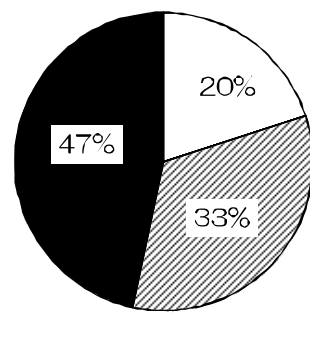
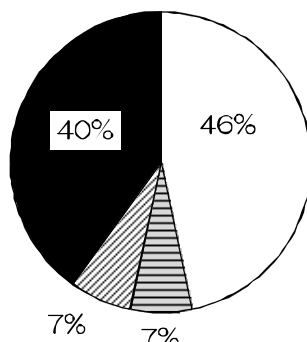
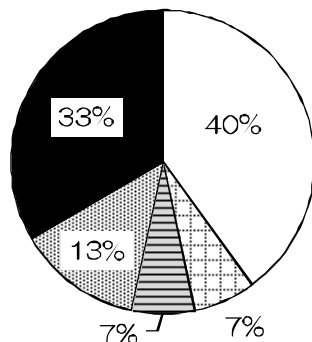
患者数	病院数
10人以下	6病院
11~20人	1病院
21~30人	1病院
31人以上	2病院
なし	0病院
無回答	5病院

[入院期間 1年未満の患者数]

患者数	病院数
10人以下	7病院
11~20人	0病院
21~30人	1病院
31人以上	0病院
なし	1病院
無回答	6病院

[入院期間 1年以上の患者数]

患者数	病院数
10人以下	3病院
11~20人	0病院
21~30人	0病院
31人以上	0病院
なし	5病院
無回答	7病院



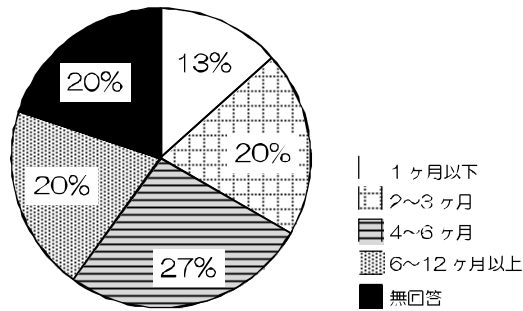
10人以下 11~20人
 21~30人 31人以上
 無回答

10人以下 21~30人
 なし 無回答

10人以下 なし
 無回答

[年間平均在院日数]

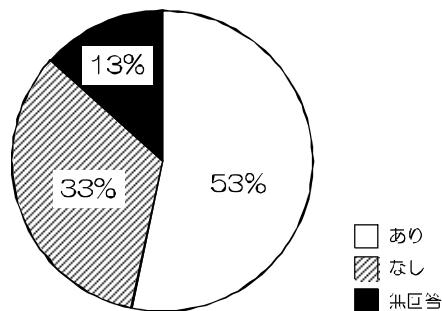
平均在院日数	病院数
1ヶ月以下	2病院
2~3ヶ月	3病院
4~6ヶ月	4病院
6~12ヶ月	3病院
13ヶ月以上	0病院
無回答	3病院
平均値	121.7日



⑪ 入院待ちの状況

[児童患者の入院待ちの有無]

	病院数
あり	8病院
なし	5病院
無回答	2病院



[入院待ちありの理由]

- ・個室が不足している
- ・一入院の平均在院日数が長くなっている
- ・入院希望者が多く満床である 等

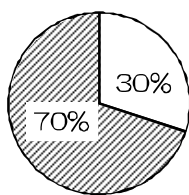
[入院待ちなしの理由]

- ・病室に空きがある
- ・入院日の調節による 等

⑫ 入院経路について

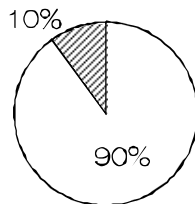
[自院他診療科]

入院経路	病院数
あり	3病院
なし	7病院



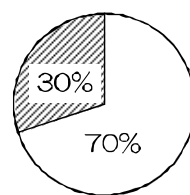
[自院同診療科]

入院経路	病院数
あり	9病院
なし	1病院



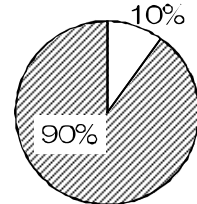
[児童相談所・福祉機関]

入院経路	病院数
あり	7病院
なし	3病院



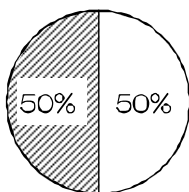
[保健所]

入院経路	病院数
あり	1病院
なし	9病院



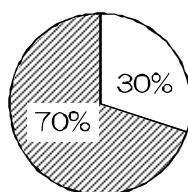
[他院他診療科]

入院経路	病院数
あり	5病院
なし	5病院



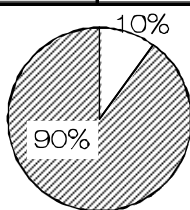
[救急外来]

入院経路	病院数
あり	3病院
なし	7病院



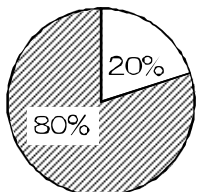
[教育機関等]

入院経路	病院数
あり	1病院
なし	9病院



[その他]

入院経路	病院数
あり	2病院
なし	8病院



□ あり
▨ なし